

【観光交流・大洲市】 田舎旅のすめり おおず歳時記探訪 <http://ameblo.jp/gogotmo/>

原点回帰

先人たちが命をかけて築き上げてきた「ふるさと」に育まれながら、私たちは何を気にするでもなく今日を迎えている。

「情報」は「金」なり。デジタルの進化は、アナログの重要性を忘れさせた。とにかく表頭らをきちんと整えて見場を良くすることで体裁を整える。これは、すべてにおいて言えることだ。私は、このことを悪いとは申し上げない。しかし、重要な「過程」を省略し、手間を省いて「利ザヤ」を稼ぐことで生じる「悪影響」への対処を怠ってはいないかと思えるのだ。

「観光」に視点を移して考えてみても同じことが言えはしないか。システム化された人々の流れ。そこには、「地域再生」の柱として「観光事業」を据えながらも、賑わいを創出することだけを重要視してツアー業界への依存度を高める。本来ならば、ひとつひとつ積み上げて自らの手で仕組みを築き上げてこそ「地域資源」を生かした「素材」が見えるはず。だが、こ

の部分を外部委託等をしたために「獨創性」を欠いてしまった。

しかし、こうした動きの中で旅行者は自分たちの求める「旅のスタイル」と「目的の地」の情報を自らの手で取得することが容易になってきた。インターネットの普及と火に油を注ぎ込むような携帯電話の進化は、逆に「アナログ」の重要性をクローズアップしている。業界において旅の企画立案などに従事する担当者などよりも、旅行者などの方が遙かに価値ある地域情報を得ることができると時代になったのだ。「着地型」と言われる原点はここにある。

「水」、「空気」、「高さ」が生み出す感動の田舎旅、という表現は、こうした動きの中で河辺郷のプロデュースをしているときに生まれた。日常生活の中



案内人と町並散策風景

河野 達郎
株式会社
おおず街なが再生館

で薄れてしまった「感動」する機会。それを「旅」の中に求めるとしたら、大洲の「町並」という空間や「屋形船」という「空間」に身を置く「時間」を、旅人と地域住民や屋形船の船頭諸氏が共有してこそ価値あるものとなる。そこには、「案内人」という存在は不可欠な要素であり、「三位一体型ツーリズム」姿が見えてくる。

河辺郷菊地道場の菊地稔氏が「土から生まれたものは土に返してやるのが原則。何でもそうじゃが向き合わにゃいけん」といった。お客様と向き合わなければ交流は生まれないと気づかせてくれた一言だった。